九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

劉辰翁研究 ： 宋元交替期の活動を中心に

奥野, 新太郎

https://doi.org/10.15017/1455991

出版情報：九州大学, 2014, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

奥野新太郎（中国文学）

劉辰翁研究—宋元交替期の活動を中心に—

論文審査の結果の要旨

本論文は、十三世紀の中国、すなわち南宋王朝の末期から元朝前期に在野の詩人として生きた劉辰翁の生涯とその文学評論活動を考察し、その分析結果を通じて中国元時代の社会と文学の実像を明らかにしようとしたものである。序章・終章を含め全体で七章の構成で展開される本論文は、劉辰翁と彼の生きた南宋末から元代前期の社会情勢をさまざまな角度から実証的に追究し、従来の元代文学研究では十分には指摘されて来なかった幾つかの点を鮮やかに喝破している。

そもそも中国元時代の文学についての研究は、現地中国においても、また我が国においても少なく、またその成果の蓄積も十分とは言えない。通俗文芸および言語学の分野としては戯曲（元曲・元雑劇）や『中原音韻』などの成果がやや先行しているが、知識人の正統文芸たる詩歌や散文の研究となるとまことに寥々たるものでしかない。加えて本論文の提出者がその研究対象の中心に選んだ劉辰翁については、近年漸く中国で専著『劉辰翁文学研究』（焦印亭著、2011 年）が出されたのみで、いまだ学界においても十分な認識が定まっていないのが現状である。劉辰翁自身が南宋の科挙及第者であり、元朝に入って以降は、官職に就くことなく、一介の在野の知識人として生涯を終え、その著作のほとんどが散逸してしまったことが大きな原因と考えられる。

まず本論文の提出者は、劉辰翁の著述活動の多くが元朝に入って以降であり、その家塾での教学を通じて、元朝の官僚や文化人たちとも広く交流していたことを明らかにし、これまで劉辰翁について一般的であった「南宋に忠節を貫いた隠逸文人」としての理解が、全く根拠の無い誤認であったことを証明した。特に圧巻というべきは、近代十九世紀末以降今日までに日本および中国・台湾で出版された『中国文学史』を標榜する著作七〇数種を博覧し、劉辰翁の記述の有無、そしてその紹介のあり方を一つ一つ克明に調査した功績である。元朝（モンゴル）時代を単純に「被征服時代」として捉え、またその当初の「科挙の廃止」を漢文化（民族）への抑圧政策として安易に説明してきた過去の文学史の偏見を見事に覆した考察だと評価できるものである。

また本論文では、現在は散逸した劉辰翁の著作の幾つかについて、その収佚と復元も試みられている。即ち、『文選』についての批評や、南宋・朱熹『詩集伝』を底本とした注釈、また劉辰翁が活動を展開した中国江西省の文人たちの詩歌を集めた『興観集』と、古今の名詩を選録した『古今詩統』の四種である。そして、以上の考察の結果、劉辰翁独自の詩文注釈活動である「評点」には、その「情」を重視する彼の文学観が濃厚に反映されており、劉辰翁がまさしく同時代としての「元代文学」のあるべき方向を指し示した開拓者として位置づけられることを見事に論証している。

以上のことから、本調査委員会は本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つものであると認める。